県民に芸術を届けた今純三

中園 美穂
（弘前大学非常勤講師）

青森県出身の洋画家で版画家でもある今純三は、『青森県画譜』を制作したことで知られる。県内景勝地や名所、県民の生活などを収めた『画譜』は、1933（昭和8）年10月から翌年9月まで東奥日報社から毎月発行され予約者が購入した。

興味深いのは、収録された100点すべての作品が版画で表現されたことである。官設の美術展覧会で油絵が入選していた彼は、関東大震災を転機に版画を研究するようになったと考えられる。しかし、なぜ『画譜』は版画による作品だったのか。

温湯共同浴場と客舎。原画は石版。『画譜』第9集の69より＝1934（昭和9）年6月発行・画像データは青森県提供（県史編さん資料）

純三は、画家自身が描いた絵画に対し、版画とは「印刷の方法を介して造られた絵画」であると説明している。簡単に言えば、描かれた絵画と印刷された絵画に区別できるというわけだ。

西洋では、油絵の巨匠が銅版画の大家でもあり、ゴヤやミレーなどは銅版画を、ロートレックは石版画をそれぞれ制作し、版画芸術界の「巨星」である、と純三は述べた。

描かれた絵画は一枚の原画として扱われ、それを所持する者は貴族階級など限定される。このため希少性の観点から、画家が直接描いた絵画に芸術的価値を置くのが常だろう。

これに対し、版画は1枚の原版から何回も原画を生み出せるので、多くの人びとに安価で提供できる利点がある。このため彼は、現代社会で庶民生活に芸術を取り入れるには版画が最適だと論じ、こうした版画に芸術的価値を見出したのである。

ただし、この場合の版画とは、版画家自身が下絵を描き、渾身の力で原版をつくって刷る版画でなければならないとした。

「正直な写実から来る迫力を尊重」すると主張したほど、彼の持ち味は写実性の高い精緻な描写である。高い写実性は優れた記録性を併せ持つ。これを版画で発揮したのである。

『画譜』の発行が始まる前に、彼は『画譜』が一般的な画集ではないと主張している。昭和初期はアトリエ社や美術新論社などが、西洋や日本の画家のさまざまな画集を、絵画などの印刷にむく原色版や写真版で出版していた。こうした画集と『画譜』は違うというのだ。

『画譜』は、彼が各種の版画技法を使って制作した原画をもとに、印刷会社で高速印刷した作品である。しかし印刷会社に任せっぱなしにせず、純三自身が工程に携わり、原画と遜色ない作品になるよう、印刷の仕上がりまで入念に確認していた。だからこそ一般的な画集ではないのである。彼は、『画譜』を庶民生活に寄り添う芸術的価値の高い版画作品として県民へ提供したかったのだろう。

多くの県民に版画という芸術に触れてもらうため、純三が全身全霊を注いで制作した『青森県画譜』。芸術が生活の中にあることを望んだ彼の願いは、県内最大の購読者数を持つ東奥日報社を通して、広く県民へ届けられたのである。